口述史から見える村の地域資源と活用を考える

- 檜原村神戸地区の事例 -

東京都檜原村　細貝和寛

１．研究背景と目的

１-1.　研究背景

日本では団塊の世代の高齢化と少子化の影響を受け、2010 年より人口減少(大正 9 年開始の人口統計)を記録し、人口構成比が大きく変わってきた。東京都西多摩郡檜原村では 1945 年の第二次世界大戦の疎開による人口流入で人口がピークを迎えたが、戦後から減少し続け、現在はピーク時の約 1/3 の人口になっている。檜原村では人口減少に伴って様々な影響が出ており、むらづくりの現状を調べるために行った第 5 次檜原村総合計画の策定において、地域住民から村の将来に対して今後に期待する声が聞かれる（図 6）。檜原村においては、団塊の世代と前後の世代が自治会などの地域の中心を担っている。しかし、戦前生まれまで地域に受け継がれてきた文化や技術などが生活様式や産業構造の変化に影響され、団塊の世代の前後で自然消滅し、地域で代々紡がれてきた人々の暮らしの記憶が途切れてしまう現象が起きている。そのため、団塊の世代や戦前の人々の記憶が失われてしまう前に暮らしに根ざした歴史として編纂しておくことは、村史などの公的な文献資料からは読み取れない情報を後世に残していくことにつながっていくと考えられる。

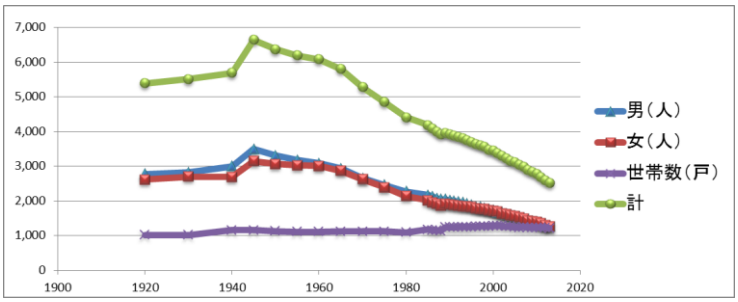

図 1.　檜原村の人口推移
（参考文献 6 より）

2-2.　研究目的

村内には自治会が約 30 地区あり、一番標高が高い地区では尾根上の 850m 付近に家が点在し、標高が低い地区は谷部の 100m 付近に村営住宅の建設などの住宅地が集中しているなど、檜原村全体の特徴を一つに絞るのは難しい。そこで、村全体ではなかなか見えてこない個性や課題点を洗い出し、現在に至るまで、地区を支えてきた団塊の世代を中心に、第 2 次世界大戦以前から檜原村でなりわいを続けている、特に 75 歳以上の住民に注目し、他地域で実績を上げている「まちづくりオーラル・ヒストリー」の手法を用いて、地域の生活文化や歴史、なりわいなどについて、今では失われてしまった生活の一部に関する口述を記録し、これからむらづくりを担う年代と共有することを目的とする。

2.　檜原村の概要

2-1.　檜原村の概要

東京都西多摩郡檜原村は、島嶼部を除くと本土で唯一の東京都の「村」である。面積は 105.41 平方キロメートルと東京都内では 3 番目に広く、93%を山林が占める。檜原村の地形は周囲を山に囲まれ、中央に浅間(せんげん)尾根が分断する形で村内を北と南に分かち、多摩川の支流である秋川が北秋川、南秋川に分かれて村役場付近で合流する。周辺地域には、南に山梨県上野原市と神奈川県相模原市、北に奥多摩町、そして東にあきる野市へ向けて山が開けて都道が走り、西に山梨県小菅村へ伸びる奥多摩周遊道路（旧有料道路）が主な村内外への交通路網となっている。

2-2.　村内の人口減少

檜原村は過疎地域に指定されており、1986 年には 3 校あった中学校の統合、1999 年には 8 校あった小学校の統合が行われるなど、出生率の低下も深刻である。また、檜原村では交通手段の充実と道路の整備も進んできているため、就業と同時に近隣都市部に転出しやすい環境ができており、ますます人口減少と少子高齢化に拍車をかけている。人口比率では高齢者（65 歳以上）の割合が 49%（2017 年 6 月時点）となり、生産人口の 45%を上回る。こうした中で、檜原村では 2004 年に市町村合併に関する意向調査を行ったところ、回答者のうち半数以上から合併の検討をする必要がないという回答が得られたことから、現在も一つの自治体として確立している。現在では一人暮らしの高齢者も増加しており、電話による詐欺など犯罪の横行があり、地域内の防犯面でも不安が広がっている。さらには、今まで祭りや自治会の維持を地区住民だけで行えていたが、人口減少による人手不足から村外からの移住者を頼りにするような場面が見られはじめている。

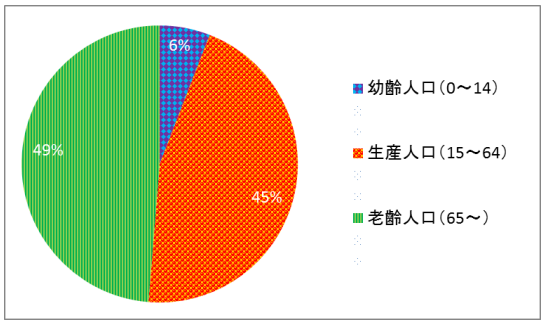

図 2.　檜原村の人口比率
（参考文献 7 より）

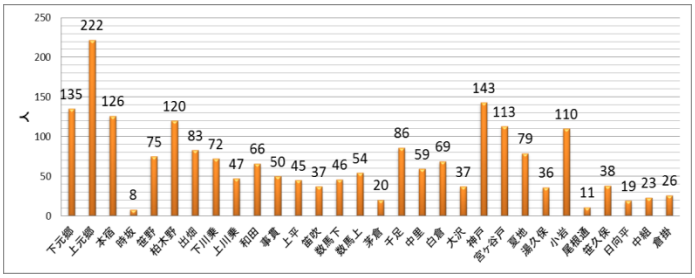

図 3.　檜原村の地区別人口
（参考文献 7 より）

2-3.　神戸地区の抱える課題

現在、私が活動の拠点にしている神戸地区は、神戸岩（かのといわ）と呼ばれる天然記念物が観光名所となっている。また、神戸地区は他の地区に比べ、川が浅く道路に面した近い場所にあり、川遊びやキャンプ場といったアクティビティを楽しみに来る観光客も多い。「神戸」という集落名には、元々地域の山岳信仰の象徴である「大岳山」を神とした時の戸（入り口）という意味があり、落人伝説もある古い歴史を持つ地区である。しかし、歴史的な証拠を示す文献や碑が過去の火災や水害などで失われており、今は口伝えでの情報が多い。年代別人口を見ると、85 歳以上の分布が最も多く、次いで 65 歳～70 歳が

多くなっている。29 歳以下の人口は特に少なく、働き盛りの世代がほとんどいないことが分かる。しかし、自治会や祭りなどの維持を考える上で、いずれ 20 歳～50 歳の若者が中心を担っていくことは明白必至である。今後は、更なる人口減少の進行に伴い、神戸地区で自治組織の維持に必要な”人足”と呼ばれる人手を集めて行う自治活動の縮小化、組のような小さな自治単位で行う講（庚申講、山の講演、二十三夜講に代表される民間信仰の組織）の自然消滅、働き盛り世代の都市部流出による自治会や祭り、伝統行事の担い手不足などの課題がより深刻になることが予想される。

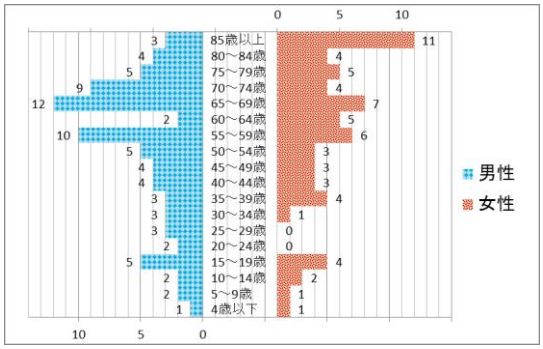

図 4.　神戸地区の人口ピラミッド
（指定区別年齢別男女別人口調より）

3.　調査概要

3-1.　調査方法

「オーラル・ヒストリー」という手法は、社会学や政治学などの分野において発達してきた手法である。社会学では地域住民への聞き取り調査から地域独自の生活像を探り出す手法として、政治学では公人への聞き取り調査から、政治的決定の背景に存在した「今だから言える」ような話を探り出す手法として用いられる。一方、まちづくりに活用される「まちづくりオーラル・ヒストリー」は以下のように整理することができる（表 1）。
目的は、「まちに伝わる「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描くことをめざす」ものであり、「懐かしい未来」とは、そのコミュニティの過去に共通する体験から、未来の地域社会へ共有すべき将来像のことを指す。本レポートでは、「まちづくりオーラル・ヒストリー」の手法を用いるにあたり、後藤ら（2005）による著書「まちづくりオーラル・ヒストリー「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く」を参考にした。

表 1.　まちづくりオーラル・ヒストリーの定義
（参考文献 3　p. 40 より）

①『記憶の採集』	住民一人ひとりの語り手の記憶から、対話を介して人生史の一端をひも解く。情報の保存・蓄積を通して活用して伝達することを図る。語り手（発信者）と調査者（受信者）との対話を通じて引き出された「言葉」は地域コミュニティで将来のまちづくりについて考え、話し合うための共通言語となる。
②『口述史記録の編集』	採集された記憶をテキストに記録し、史料価値を持つ口述史（口頭で述べたことをまとめた書）として編集する。
③『コミュニティ史の編纂』	いくつもの口述史を積層させることによりコミュニティ史として編纂し、様々なメディアを通じて公開する。
④『コミュニティの将来像の構築』	地域社会がまちづくりの文脈としてコミュニティ史を共有するとともに、現代的解釈を与え、そこから地域共同体に関わる要素を抽出することでまちづくりの将来像を導く。

3-2.　調査方法の実施手順

調査にあたっては、実施段階ごとに必要があり、実施手順をまとめた（図 5,表 2）。

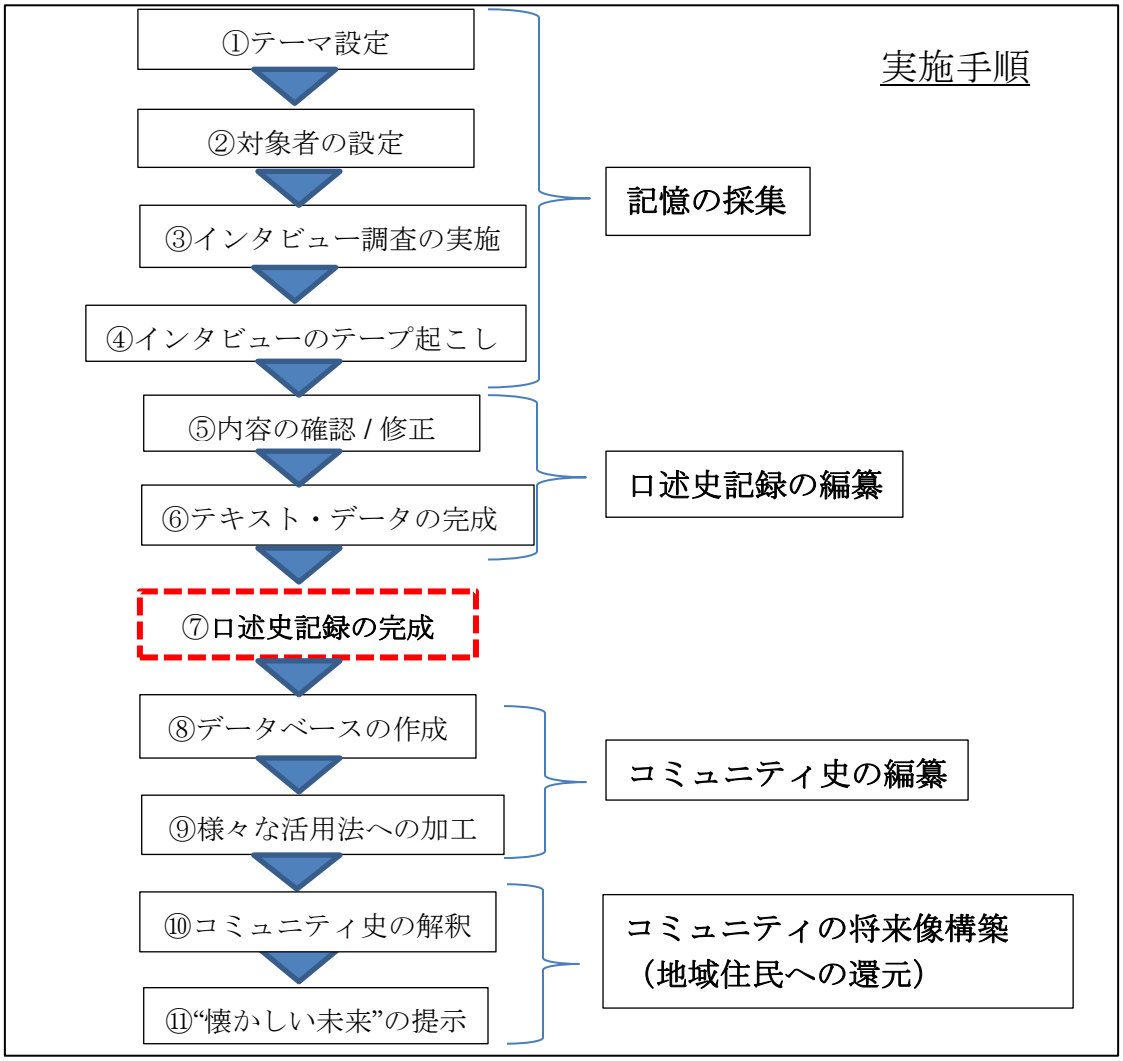

図 5.　まちづくりオーラル・ヒストリーの実施手順
（参考文献 3　p. 54-55 より）

表 2.　まちづくりオーラル・ヒストリーの実施手順の説明
（参考文献 3　p. 54-71 より）

テーマの設定	市町村史などの史料から歴史の概略を把握するなどの予備調査を基に市町村全体の移り変わりを客観視し、「なりわい」「遊び」「祭り」など話題の広がりがあるテーマを設定する。調査の過程で新しいテーマに広がりがある場合は柔軟に対応する。
調査対象者の選定	テーマにより、属性（性別、職業、年齢、居住地など）の限定も可能。
インタビュー調査の準備	歴史年表を準備しておくことが望ましい。テーマにより、古地図や古写真なども準備し、語り手からの資料提供を願うことも考えられる。 基本は、レコーダーとメモ用の手帳を持参する。
インタビュー調査の実施	語り手が自然体で話せる自宅や職場。2 人以上のグループで調査を行う。理由として、①雑談のようなリラックスした雰囲気を創りだす、②質問役と記述整理役など役割分担ができるため、③調査者の個性が多いと質問や会話の多様性が生まれる。
口述内容のデータ・テキスト化	録音を行った内容（断られた場合は筆記にて）を基にその時の状況や調査者の感情なども記録する。
語り手への確認	テキスト・データを整理し、小見出しをつけて読みやすくレイアウトする。その後、語り手に内容に確認を求める。合わせて、口述史記録の活用の際に公開の承認を得る。個人情報の取り扱いには気を付ける。発言内容の削除を求められる場合は、内容によっては非公開資料として記録することも検討する必要がある。
データベースの作成	個人の口述史記録を「テーマ情報」「時代情報」「場所情報」ごとに細分化する。データベースの項目ごとにカード化し、KJ 法（ブレーンストーミングなどにより得られた発想を整序

	し、問題解決に結ぶ方法）でテーマ、時代、場所を軸にカードごとの内容の類似性を整理する。
加工	地域住民への最適な還元方法を考え、実施する。

ただし、以下の注意点を踏まえて調査を実施した。

① 口述史記録は語り手と調査者の共同著作物である。
② 政治や宗教に関する事柄や個人の評判など話題は控える。
③ 調査者は中立的なスタンスを保つ。
④ 語り手への趣旨（成果がどのように生かされるのか）を説明する。
⑤ 信頼関係に基づくコミュニケーションをこころがける。
⑥ 地図や写真などを取り扱う場合には指示語が何を指すのかメモする
⑦ 史実と異なる発言は別途村史などで確認する
⑧ 方言もそのまま記録する。

3-3.　調査対象者の選定

調査に当たり、地区の自治会長や重役の方にも事前に確認し、調査対象者を選定した。調査場所は調査対象者の自宅で行い、2017 年 10 月から 11 月にかけて計 15 人を対象に行った（表 3）。調査時間は一人当たり 1 時間程度とし、2 時間半に及ぶこともあった。

表 3.　調査項目

対象者	インタビュー項目
○年齢 65 歳～85 歳以上 （村外からの移住者を含む） ○時代区分 ・戦前（1945 年以前） ・戦時中（1945 年） ・戦後（1945 年以後 10 年以内） ○神戸地区に住所を置く人 ○テーマ「神戸地区の移り変わり」	○子ども時代の暮らし ・親の仕事、なりわい、遊び、学校、生活 ○社会人時代の暮らし ・本人の仕事、地域活動、なりわい、生活 ○現在の暮らし ・生活、生活環境、なりわい ○移り住んだきっかけ（移住者） ・どこから引っ越してきたか ○神戸地区の自然 ・どんな印象、どう変わってきたか

4. 調査結果と編集

4-1.　調査対象者

調査対象者を調査日程の順で整理した（表 4）。年代は戦前生まれが 10 人、戦時中が 4 人、戦後生まれが 1 人となった。神戸地区出身が半数以上を占め、他地区(村外含む)出身は 5 人となった。

表 4.　調査対象者リスト
（世帯の内、家族は夫婦と子どもの夫婦などを含む複数世代とした）

番号	調査日程	名前	生年	性別	出身（移住者）	世帯（家族・夫婦・個人）
1	10/23	A	1949	男	神戸	個人
2	10/25	B	1944	男	神戸	夫婦
3	10/27	C	1918	女	神戸	個人
4	10/30	D	1932	女	藤倉	個人
5	10/30	E	1941	女	（武蔵村山市）	夫婦
6	11/20	J	1933	男	神戸	夫婦
7	11/9	F	1925	男	湯久保	個人
8	11/13	G	1924	女	神戸	個人
9	11/15	H	1927	男	神戸	家族
10	11/17	I	1932	女	千足	家族
11	11/22	K	1937	男	神戸	家族
12	11/24	L	1937	女	神戸	家族
13	11/27	M	1939	男	神戸	家族
14	11/27	N	1939	男	神戸	夫婦
15	11/28	F	1932	女	小沢	家族

4-2.　口述内容

調査対象者から聞き出した口述内容を基に、時代区分ごとにテーマ、場所、出来事の内容で分けてまとめた（表 5）。

表 5.　口述内容の時代区分類

時代区分	テーマ	場所	出来事
明治時代	伝説	湯久保	・オオカミ信仰と実在エピソード 「（おじいさんが生まれるときに）小沢から御前（山に）行く途中の神戸の境目でかい穴を掘って、落とし穴って。そこにオオカミが落っこたっていう。そのオオカミが産む間、子供がいてちょっと乳が出てた。それが明治５年の話。」
		栃平	・茅刈りとオオカミ 「おばあ（お母さん）が昔カヤ刈りに行ったときに、そこでオオカミの群れを見たんだよ。それ以来、怖くて行かなくなったってよく聞かされたもんだ。」
		赤井沢	・昔の集落 「赤い沢のちょっと行ったところに赤井澤神社ってあるだろ。あそこは昔は阿加井大膳っていう人が住んでて何軒かいたみたいだな。神戸岩の向こうに昔は人が住んでたんだよ。いまじゃあみんな下に下りてきてるけどな」
戦前 (～1939 年)	暮らし	神戸	・お膳箱 「昔は私らの生まれた当時はね、どこの家だってみんなお膳箱っていうのがあってね。そん中にお茶碗しまっておいてごはんの時には出してきてそれ食べてお茶飲んでそれまたしまってまた何日か経って洗ったの。」「今みたいに水が充実してなかったの。」 ・しょうゆづくり 「豆を煮たのを入れて、麹が入るからさ、一週間たちゃボコンボコン煮えてくるの。その頃醤油屋さんっていうのが回ってきて、各家庭の楽な家（ちょっと余裕のあるところ）に泊まり込んで３日・４日経っておしょうゆいっぱい絞って、しょうゆを一升瓶で作って、ほんとに純粋なしょうゆ。泡っていうのが、しょうゆ絞った後に泡がたくさんできるの。大根とか、聖護院ちゅうのたくさん作ったんだけど、輪切りにして、粟漬けって

			いうおしんこが最高にうまかったんだよ。」 「人糞を山に持って行って畑にいれた」「家畜を飼ってたから、豚や牛の糞を堆肥に。」 ・麦踏み 「ずーっと農業いっぱい作ってあったから。麦ってのはさ、お正月頃こう出たのを踏んでね、麦ふみっていうのをやってね。」 ・嫁入り 「（藤倉から嫁いできたけど神戸に対して特別な感情は）ないね、別に。同じ檜原だからね。 「（千足に対して神戸は）もっと田舎で寒いところ。向こうの方が町だわな、定期バスが通るから。こっち（神戸は）定期バス通らないからちょっと不便だったね。子供なんか駐車するのにつれていくのに負ぶって停留所行ったり。山超えて小沢の学校に医者に連れて行ったね。」 ・神戸は河原で寒地獄 「神戸は河原で寒地獄なんてよくいったんだ、千足で。川の近くで寒いって意味。」 ・五右衛門風呂 「嫁いだ当時は、水道もない、電話もないでね、大変だったね。お風呂も、薪で燃してたから五右衛門って言って、下は金属でで薪で沸かしてたから,『熱いよ』っつたら、下におきがあるからいくら水足しても水道がないから、川から水汲んできてお風呂入れて緩めたことがある。」
		湯久保	・漬け物づくり 「切ってすぐ食べられる、もみ漬けっていえば一夜置けば食えたんだな」「長くすんのは、昔は丸甕につけたかな、一樽ってこんなでっかい（手を広げて）樽に漬けて。」「昔は味噌もうちで漬ける、しょうゆもうちで作ったんだから。しょうゆ絞る業者が来て。」
		檜原村	・結婚 「結婚すれば状況の悪い方と一緒になっても我慢して一生を過ごしちゃったんだね。ほんとに離婚ちゅうのはなかったから。昔は（離婚が）恥ずかしかいから。」
		学校	・弁当 「お弁当にはね、昔はクジラ肉が安かったの。お弁当にもってくとね、いつでも固くて食べられないんだって。固くてね。」 「学校の帰りにね、枝とか拾ってくるの。」
	移動技術	旧五日市町	・交通 「主人がやってきた頃はね、車なんてどこにもなくて、トラックに乗ってね、みんなでお祭り行ったの。五日市のお祭りにね。子供をぞろぞろ乗せて。それでも平気だったのよ。夢みたいな話でしょ。江の島や鎌倉にみんなでうちのトラックで行ったことあるよ。でもその次はね、八王子の追分の駐在で捕まったの。」
	なりわい	山の上	・炭焼き 「その当時はね、炭焼きやってたんだわ。きっと全然知らないだろうけどね、馬方っていうのがいたんだわ。」 「炭は長いまんまで出ないんだよ、めったに。みんな、３つにわけて俵に入れるんだ。小沢に検査官がいて、外にいいの入れて、中に悪いの入れて。」 「昭和１９年に兵隊に行って。それまではうちの仕事でよそのことはやらなかったんだよ。うちの山で炭焼きやったり、養蚕やったり、小麦植えたり。豚を飼って牛を飼って。杉山も少なかったけど、杉が良ければそれを一本いくらで材木屋行って。それを幾人かで受け取って分けて、杉を伐採する。そういうのが仕事みたいで。うちの仕事だけでやっていけたんだわ。」 「昔は、すぐそこ(家の裏)で炭焼きやってた跡があったな」 ・養蚕 「昔は、お蚕さんやってたから、女の人なんか、山の上に登って、よくかごいっぱいに桑の葉っぱ摘んできて、降りてきたもんだよ」「冬は炭焼きして、夏は養蚕やってたの」
		湯久保尾根	・農業 「山に畑、サスっていうのがあって、そういう時にはね、昔なんか動物も拾わなかったからね。途中にね、畑がちょこっとあって、きゅうりなんかあるとね、こんな小っちゃいのがあるとね、もうごちそうだったんだよ」
		湯久保	・わら草履作り 「（靴はないから）わらじなんてのは、それからわら草履も（作って

			た）。」
			・動物 「昔はオオカミがいたんだね」「藤の根を、でんぷんがあるからそれを掘った穴はあるだけで山でイノシシを見たことがなかったな」「サルも、湯久保にいたけど、熊だけは見たけどほんとにいなかったんだよ（他の動物は見なかった）」 ・猟師 「昔は猟師が多かったからいればみんな撃っちゃんたんだな（毛皮を売っていた）」「おじいさんが鉄砲、的屋やってたからおれもやりかたかったんけど（おじいさんが）『しちゃだめだ』って。」「古い鉄砲は火縄銃とかあったんけど」
		檜原村	・木の皮 「昔は屋根葺きもしたから、（木の皮が）よく売れたんだわ。今の神社なんかはヒノキの皮で茅葺きみたいにやってる（た）から。」「杉皮をシュロ縄で結束するときには 15 ㎝くらいに切ったのを幹に巻いて。そいうのを専門に売っていたんだね。」
		水の戸沢	・川のり 「昔はここら辺でも川のり採ってよく干してたんだけどな、ずーっと採ってたおばあさんが川で採ってたら亡くなって、誰も採らなくなった」
	遊び	神戸	・子どもの時 「川遊びでしょ、羽根つきもやったし。」 「今はみんな畑作らないでしょ。ずーっと麦がいっぱい作ってあったから。だから麦畑飛んで歩くのね。あの麦ってのはさ、お正月出たのを踏んでいってね。麦踏みっていうのやってね。踏んで良かったんだから。子どもが踏んでも平気だったんだわ。」 「神社の中で２～3 人でかくれんぼやってた」「お寺とか、自治会館でかくれんぼやってた」 ・野良野球 「ボールは手で打ってたもん、バットなんか買えなかった」 ・魚とり 「魚取りが多かった。昔はえらいいたもん。ザルでもぐったりして捕った」
		神戸鍾乳洞	・法穴 「昔は、あそこにお坊さんが住んでたっていう話があってな、法穴っていうんだよ」
	自然	神戸	・山 「昔はね、こんなに山に杉なんか植わってなかったのよ。それがいまじゃあ日が陰っちゃってしかたないね（日照時間が減った）」
戦時中 （1939 年～1945 年）	戦争	出兵先	・生活 「昭和 19 年で兵隊行って。」「戦時中軍隊はわら布団に寝てたんだよ」「交代で泥水みたいなところで水を浴びた」 ・炭焼き 「武蔵兵団で戦争行って、同じ多摩に住んでる人がいたけど、他に炭焼きできる人がいなかったからやってた」 ・戦争を子供時代に経験 「戦争には無関心だったな。まだ子どもだったからな。」 ・疎開 「親戚がたくさん来た」 ・薪を取られた 「薪が置いてあると、（兵士に）持っていかれたなあ」
戦後 (1945 年～)	なりわい	神戸岩	・林業 「神戸の赤井沢、神戸岩の間なんかに修羅を作ってな、ソリで１日２回出してたよ。滑りをよくするために油塗ってたからよ、危なくてしょうがない。でも、不思議と落ちなかったな。」
		神戸	・神戸マス釣り場（釣り堀） 「ペルトンさんね、マス釣り場やったの。私なんて事務所やってたの。だから、終戦直後は年中外人さんが家の中でどたばたやってたの、この家で。その頃はまだ裏手だったから座敷もあったの。昭和３０年ごろね。」 ・戦後山を下りてからの仕事 「峰岸製材の雨が降る時の手伝いしたり。（湯久保から」下りた年から多

			摩川と浅川の麻刈り。多摩緑化つう会社で、請負だから準社員で（働いた）。最後は一番大きなところは東電の仕事が多くて、新多摩変電所っていうのがあって、そこは畑があったりスギがあったりそれを伐採したり。梅の木の木の畑があったのを掘り取って。変電所ができてからは郊外の芝刈りやって植木の剪定にずっといって。」
		八王子市	・生糸工場 「（戦後）女の人はほとんど生糸工場に働きに行ってたね」
		神戸	・蒸気自動車 「俺が子どもの頃なんかはな、ここら辺で木炭車が走ってたんだよ」
	暮らし	神戸	・野菜の保存 「終戦の時なんか父親が野菜なんかを穴に掘ってしまっちゃたの。あの、朝鮮人が来るから（隠した）。その頃は芋穴っていうのがあったからね。」 「実家の裏っかわなんかに原木お父さんおいてしいたけなんてとったの。大根だって切り干し、柿だってなんだって甘がきだけじゃなくて蜂屋っていう。干すの、ずーっと。オサツも干しイモっていうね」 「月見の時なんか、縁側に団子おいとくと子どもが取りに来るんだよ、そうするといつの間にかなくなってたりしてな。他の家に勝手に取りにいって良かったんだ」 ・もちつき 「うちじゃあずーっともちつきをしてたんけど、それこそ２０年やってたんでしょうよ。暮れにもちつきよ。お父さん亡くなってからやってないんだよ、4～5 年しないことだわな。」 ・薪で沸かす風呂 「今だってうちじゃあ薪だけど、お風呂。」
	自然	神戸川	・水害 「今みたいに川（の法面）がきれいになってないから、大雨の時なんか、こーんな（両手広げて）大きな岩が流れてきてよ、道路が崩れたんだよ」 「川の近くに家がある人はよく逃げてきたね」
	遊び	旧五日市町	・大人の娯楽 「時間があれば五日市に降りて劇場（映画館）に行ったな。にスギの材木を出して、売れたお金で。映画を見るのが好きだったからな」
		神戸鍾乳洞	・度胸試し 「あそこは下穴って言って、おれたちが子どもの頃は 3～4 人で行って度胸試しをしたんだよ。下の学年のやつを先に行かせてな」
		水ノ戸沢	・やまっかじか 「昔はあそこで”やまっかじか”なんか捕ったんだよな。トウキョウサンショウウオっていったっけなあ。」
	地域活動	檜原村内	・青年団と婦人会 「昔は青年団っていうのがあったからね、盆踊りやったり、浅間嶺に桜の木を植えに行ったりしたよ。」

4-3.　キーワード抽出と時代変化の読み取り

戦前は、比較的“暮らし“にまつわる出来事が多く、子どもが労働力として考えられていた様子がわかる。その合間で、かくれんぼや羽根つき、凧揚げしながら麦踏みをしたなどの子供にとってのわずかな“遊び“があった様子が伺えた。また、生活面で家族が多く、お弁当のエピソード一つとっても、少ない食糧をいかに分配するのか、冬に向けてどう保存するのか、という暮らしの術を実践している様子がわかった。お膳箱という現代では使われていない食事の文化があり、当時は上下水道がまだ発達していない際に水を少なく食器を洗うなど水資源の重要性が分かるエピソードがあった。お膳箱を使っていた当時の食生活について今回の調査では聞けなかったため、改めて伺いたいと考えている。

“なりわい“では、戦前に冬の炭焼きや林業、夏の養蚕を営んでいた方は生活資金が得

られても遊ぶ、という部分の話がなかったが、戦後は娯楽も多くなり、映画を見るという出来事が伺え、生活の豊かさがあるように感じた。戦後、神戸地区の自然を利用する形でアメリカから文化が入って設立された神戸國際マス釣り場の話では、ペルトン氏と呼ばれるアメリカ軍兵士と神戸地区との仲の良さが伺えるエピソードがあり、檜原村の中でも閉鎖的と言われる神戸地区では意外で、実際にペルトン氏を讃える石碑があるほど、その関係の深さが伺えた。

戦前は、生活上身の回りにある全て（自然や神社など公共的な空間）が「遊び」の場所であり、「なりわい」と「生活」が神戸地区だけでほとんど完結していることがわかる。そして戦時中では出兵した人と街から疎開で親戚を多く迎えたという話がそれぞれ聞かれ、戦時中でも炭焼きをやったという話があり、ここまではある程度昔の技術が必要とされていたことが伺えた。しかし、戦後に移動手段の発達とともに近隣都市でも「遊び」ができるようになり、「なりわい」としてトラック運転手や生糸工場など工業的な面が出てくるようになった。段々と技術や生活文化、仕事が外から入るようになると、炭焼きや養蚕、林業をやっていたような方は、結婚して子供が大きくなってくると山の上の集落から下りたところにある集落（湯久保から神戸などに下りる）や村外に出るようになるとともに、今までやっていた仕事の延長を村外で仕事をするようになるなど、檜原村の神戸地区の産業構造も戦後から一気に変わったことがわかる。そうした環境の変化の中でも、生活面では現在も薪で風呂を沸かす生活を送っている方がおり、昔の生活は完全に失われていないことが分かった。

5.　神戸地区で得られた口述記録内容の活用に向けて

5-1.　地区住民への共有方法

今後神戸地区で得られた口述史記録を活用する前段階として、調査対象者に対してお茶会のような参加者が気軽に話し合える機会を設けることが考えられる。調査対象者がリラックスできる状況を作ることができれば参加者同士の交流が活発になり、一人では思い出せなかったような新たな情報を引き出す効果が期待される。さらに、古写真などの資料を見ることができれば記憶をより鮮明に引き出しやすくなる。また、調査対象者の世代を知らない子どもや孫の世代に対してデータベース（個人の口述史記録）に落としこんだ無加工の情報を読み上げる場を設けて共有することが大切である。多くの地区住民を巻き込むことで、調査者の視点だけでは得られなかった発見や解釈に導かれる可能性があり、地区住民が納得する活用方法につなげるヒントや方法の創造が図られる。

他地域の事例では、共有方法として「口述史記録のまとめ冊子」が多く用いられている。冊子には個人のデータが詳細に書かれるため、公開にあたっては範囲を限定して地区住民だけに見てもらえる機会を設けるなどの工夫も必要と考えられる。まとめ冊子の作成に当たっては住宅地図などを用いて地図情報に落とす方法があり、出身地や地域住民の思い出のある点（位置）を線（道、通り、川など）で結び、語りの中で出てきたキーワードを配置して一つの地図にまとめていくと、視覚情報として外に発信する際の加工にもつなげやすいと考える（図 6）。

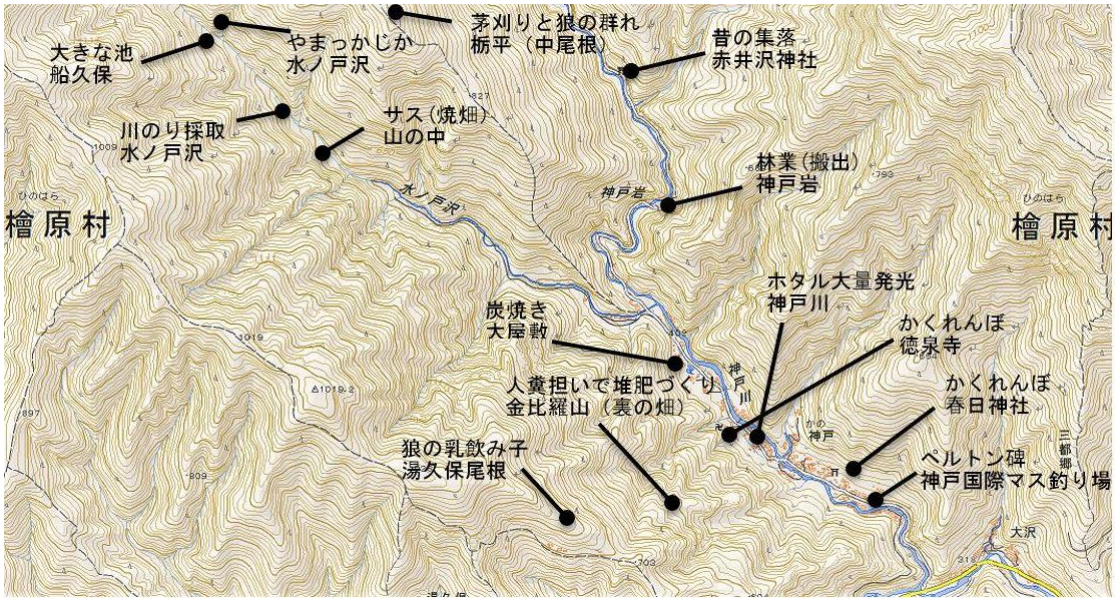

図 6.　口述史を基に神戸地区の出来事を記した地図（作成例）

5-2.　口述史記録の活用方法

口述内容を振り返ると、今では見られない「食」にまつわる出来事が多く、昔の料理や料理に至るまでの詳細な段取りなどをまとめていくと、当時の献立や食事風景をイラストや写真を交えて残すことができ、当時の暮らしの復元にもつなげられる可能性がある。

また、神戸地区では林業と冬の炭焼き、夏の養蚕を中心にやっていた「なりわい」をまとめていく際に、使っていた道具や作業風景などの現場の写真を合わせて見ると、当時の様子が詳細にわかり、地元の方に当時の暮らしぶりについて語ってもらう際の補助になるだけでなく、技術の伝承が可能なことに関しては体験や一つの現代の「なりわい」につなげていけると考えた。

5-3.　口述史記録の管理

現在、檜原村では他地区で村外から檜原村に関わっている移住者・活動団体による食文化などのテーマを設定した聞き書きを主軸にした動きが少しずつ起こっている。一人は、増田昭子さんという「在来作物を受け継ぐ人々-種子（たね）は万人のもの-」（2013 年）や「雑穀の社会史」（2011 年）の著書に代表される民俗研究家で、現在に至るまで檜原村の藤倉地区を中心に食文化に関わる調査を行っており、2017 年 11 月より多摩地域で興味がある人を集めて勉強会を開催し、私自身も参加している。また、その増田さんから引き継ぐ形で、食文化をテーマに 2017 年設立された NPO 団体が檜原村の藤倉地区を拠点に活動を始めている。私の 1 期後に入った檜原村の協力隊員の一人も、檜原村の上元郷地区で調査を始めようとしている。今回は神戸地区を取り上げたが、村内で事例が増えてくると違う方面から同じ人に対して調査を行う可能性も発生する。加えて、情報管理の面でも口述史記録を個人に集約していくには編集や加工の面でも時間も手間もかかることが今回の調査でわかり、そうした場合に有志団体など同じ方面で動くグループの存在が必要と考え

た。有志で集まることは、横のつながりの形成によって互いの情報交換の場ができ、個人で継続が難しい部分を役割分担して協力する体制をとりたいと考えている。

6. まとめ

今回ご協力いただいた住民の方に感謝するとともに、当事者だけではなく後の世代にも目に見える形でどう還元していくのかが課題となった。改めて、「過去」をただの過去の話として留めるのではなく、その地域らしさ、と言えるような自然とともに寄り添って人が暮らしてきた景観の中にある要素を複数の人生史を紐解いて抽出し、組み立てていく過程で、後の世代の視点を組み込んでいくことで現代に通じるものを創造し、還元していくことが「まちづくりオーラル・ヒストリー」の最終的なゴールと考えられる。

そのため、「まちづくりオーラル・ヒストリー」の目的である「懐かしい未来」の提示のあり方は実施する地域で変わってくるものであり、檜原村神戸地区では自然に根ざした生活の中で機会が少なくなっている 3 世代の交流の場が増えることを願う声が今回調査を進める中で聞かれた。口述史記録を調査対象者とその子どもや孫世代に伝え、目に見える交流や体験の機会を作ること。そうした機会で次世代を担う子どもの代で郷土愛と言える愛着が湧くきっかけにし、一度は外に出て行ったとしても故郷のことを自慢に思える住民が生まれる環境が作られていき、住民自身で地域のために動ける住民の気運を高めていった先が神戸地区での「まちづくりオーラル・ヒストリー」のその後である。今後も継続して地域住民と関わり、後世にも村の暮らしを残していくきっかけに貢献していきたい。

〈参考文献〉

1. 瓜生卓造(1977)檜原村紀聞・その風土と人間,東京書籍,p234-242
2. 中神賢人,後藤春彦,田口太郎,山崎義人(2004)「口述史調査記録のデータベースシステムの開発に関する研究 ～まちづくり・オーラル・ヒストリーを事例として～」,日本建築学会技術報告集,10 巻 20 号,p.301-306
3. 早稲田大学後藤春彦研究室 後藤春彦,佐久間康富,田口太郎(2005) 「まちづくりオーラル・ヒストリー「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く」,水曜社
4. 山崎義人,後藤春彦,佐久間康富,田口太郎(2009) 「まちづくりオーラル・ヒストリー-個々人の口伝の人生史を積層させることから社会的文脈を出現させる試み」, 日本都市計画学会、都市計画 58 巻 277 号 ,p35-40
5. 岡本章大,吉武舞,川添善行(2013) 「記憶の共有による風景の継承-オーラルヒストリーを手法として-」,風景・デザイン研究講演集,No.9
6. 檜原村 HP（http://www.vill.hinohara.tokyo.jp）
7. 檜原村勢要覧 2016
8. 檜原村「指定区別年齢別男女別人口調」
9. 檜原村過疎地域自立促進計画（平成 28 年度～平成 32 年度）
10. 第 5 次檜原村総合計画

巻末資料

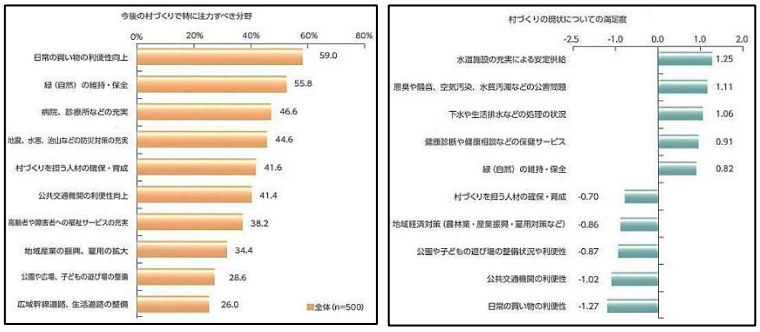

図 7.　むらづくりに関する調査に関して
（檜原村第 5 次総合計画より）